

温泉発見伝説と動物

— 岐阜県平湯温泉と猿 —

菱 川 晶 子

1. はじめに

わが国の温泉地には、温泉発見の経緯や由来を語った伝説が数多く伝えられている。この温泉発見伝説は、民俗学でも早くから注目を集めており、最も早いものでは高木敏雄が『日本伝説集⁽¹⁾』の「縁起伝説」に取り上げている。また柳田國男も『山鳥民譚集⁽²⁾』や『日本伝説名彙⁽³⁾』等で動物名の付いた温泉とその由来について記し、白鷺や鹿等は古来霊物であり、神主や僧侶が発見者の場合にはこれらの動物が土地の神仏の使者伝令とされるのは当然のことだと述べている。

一方、『温泉大鑑⁽⁴⁾』に「温泉の信仰と伝説」を記した加藤玄智と宮坂光次は、「発見伝説」を七つに分類している。そのうちの「鳥獸に教えられて発見した温泉」において、鳥獸等にも自然泉や温泉をめぐらして集まり、好んでこれに浴する風習のあるのはまぎれのない事実であると述べ、信心深い昔の人はそれを鳥獸の習性とは考えずに神仏の使者や化現と考えたと指摘している。これらのことから、温泉発見伝説には人々が動物の行いをどのように捉えてきたのかを知る手掛かりがあるものと考えられる。

その後も山口貞夫の四分類⁽⁵⁾を始め、いくつかの分類案が示されているが、それらには共通して「動物が教えた」、あるいは「導いた」とするものがみられることから、動物の関わ

る伝説が温泉発見伝説の中でも重要な位置を占めているのは間違いない。

筆者がこれまでに確認した伝説の中には、一つの温泉地で複数の異なる伝説が語られている場合があった。また長野県の鹿教湯温泉のように、現在人々に親しまれている温泉名が後の時代の改称によるものであり、それに伴って伝説が新たに生成されていることもあった⁽⁶⁾。一方で、今の温泉名の他に伝説にちなんだ別の名称が存在したという例も少なくない。動物名を冠する温泉へ、あるいは逆に動物名を伴わない温泉へと、温泉の名称もそれぞれの地域の歴史や事情によって揺れ動いているようだ。

自然からの恩恵である温泉を享受するため、これまでに多くの浴場が開かれてきた。岩手県鉛温泉のように、戦を逃れて山中に住まい、後にその一族が温泉を発見して開湯したと語る場合もあった⁽⁷⁾。人々は、大地の恵みであるが故に湯の枯渇を恐れ、また利用者の増減に影響を受けながらも、営みを続けている。そのような温泉地の様相は発見伝説にも大きく関わるものであり、温泉地毎の個別の分析が肝要となる。

本稿では、数年来調査を進めてきた岐阜県高山市にある平湯温泉を取り上げる。平湯温泉は周囲を乗鞍岳等の山々に囲まれた、中部山岳国立公園地内に位置する温泉である。奥飛騨温泉郷の中でも歴史が古い平湯温泉は、

武田家ゆかりの軍勢が白猿の様子を見て湯のありかを知ったという話が伝えられている。この温泉発見伝説にちなんで新しく作られた湯花祭りと、古くから守られてきた薬師如来の祭りについて、また平湯の二つの伝説についての考察を試みることにする。

2. 平湯温泉概略

平湯は現在高山市に入るが、長らくは岐阜県東北端にある吉城郡上宝村に属していた。この上宝村の村域の大部分は山地が占め、集落は高原川沿岸山間部のわずかな平坦地に散在している。平湯は乗鞍岳西北麓の標高1233メートルの高地にあり、東は長野県との県境になる。また高原川の上流溪谷に近く、四囲には安房山や焼岳、西穂高岳、奥穂高岳、槍ヶ岳等の高山が続いている。他地域に繋がる道には、安房峠を越えて長野県南安曇郡安曇村中の湯に抜ける安房峠道や、栃尾から中尾、中尾峠を越えて安曇村上高地へ抜ける中尾峠道がある。これらの道は、中世には北陸から鎌倉へ抜ける主要街道として、鎌倉街道と呼ばれていた。現在の安房峠を越すルートは、国道158号となっている。また、平湯から高山へ抜ける平湯街道や、越中へ繋がる越中東街道も近世期から存在した。現在の富山市に当たる越中岩瀬湊には、高原川や神通川を通じて、高原郷山中から伐り出された材木が流送されていた。

乗鞍岳から流れる平湯川沿いには、平湯温泉の他に福地温泉や新平湯温泉が湧いている。また槍・穂高連峰が水源となる蒲田川流域には、新穂高温泉と栃尾温泉の湧出がみられる。新穂高温泉には、土砂災害で流れた蒲田温泉も含まれている。この五つの温泉は近年奥飛騨温泉郷と呼ばれて広く親しまれているが、古くから知られているのは、平湯温泉と旧蒲田温泉の二つである。東部山岳地帯は1934年に中部山岳国立公園に指定されて

おり、この奥飛騨温泉郷を拠点に、登山や観光を楽しもうとする人々が各地から訪れている。

平湯の名称は、小字に「湯の平」があることや、山の平らなところを方言で「平」ということに由来する等の説がある。農業に適さない高地にある平湯だが、字浴場山の下から湧き出る温泉を田に引いて、古くから稗の栽培が行われてきた。苗を幾度も植え替えて丈夫にし、寒冷な土地ながら温泉の利用を通して栽培を可能にしたのである。他に、豆類やセンダイイモの栽培も併せて行われてきた⁽⁸⁾。

江戸時代の平湯の様子を文献にみることにしよう。「枕の月 高原日記」と「御供の日記」を順に示す。

「枕の月 高原日記」は、近江国の海量法師が、旧知の田中大秀の招きによって、飛騨の東北部にある高原地方を旅した時の歌日記である。田中の筆になる。田中大秀は飛騨高山の生まれであり、本居宣長門人の江戸後期の国学者である。時は文化3年(1806)になる。

7月の初めに高山を訪れた海量法師は、8月3日に平湯山の滝に導かれて平湯へ出立している。平湯山の滝とは、今日平湯大滝の名で親しまれている名瀑である。途中、八賀町の還来寺や岩屋等で休息しながら、旗鉾村で宿を取り、翌4日に平湯へ到着する。以下一部を次に引く⁽⁹⁾。

四日平湯のたむけをのほる笹のしけみ露いとふかし

久かたの雲井にみえし鞍かねの高根にちかき山わけゆくも 巳の時過る頃平湯むらにつきぬ小林又八衛門三郎か家にやとる^(ママ)」こゝは先つとし浴場に来てそのほとやとれり^(ママ)ける家なれば人々いとなつかしけにいひてあるししの、しけるけふたき見むといへと雨降出ぬれはいかて行えたまはむといへはとゝまりぬ (中略) ひ



図1. 平湯温泉周辺図（本図は、国土地理院発行の5万分の1地形図を使用したものである。）

とひ湯あみなとしてくらしつ

平湯に着いた一行は、小林又八衛門三郎の家にまずは身を寄せている。小林家は、平湯一帯を任されていた名主の家である。先年も当家に宿を取ったというのは、田中大秀のことだろう。小林家の人々は、旅人を懐かしみ馳走してもてなしてくれたようである。あいにくの雨のため、大秀らは滝へとはやる心を抑えながら、この日は湯浴みをして過ごしている。それ程に、平湯山の滝はこの地の名所であったことがわかる。

また、本記述からは、身分のある者が平湯を訪れた際には、名主の小林家に宿を取るのが常であったと解される。翌日名瀑に感嘆した一行が6日の昼に立ち寄ったのも、今見村の今見衛門の家だった。今見家も、古くから今見一帯を治めた有力者であり、今見の村名はこの家の名前に由来していると同書にもある。

「枕の月」から35年を経た天保12年(1841)、「御供の日記」が記されている。当時飛騨郡代であった豊田藤之進友直の巡視に随行した、地役人山崎弘泰の旅日記である⁽¹⁰⁾。同年4月4日に平湯を訪ねた時の様子を次にみよう。

此峠は鞍嶽のしたにて甚高ければ、嶺近く成りては若葉もいまだささず、桜の花所々に咲きて木深きかた陰には雪さへぞ猶消残りたる、からうじて登りはてつるに、向のかたに平湯の嶽といふ山いと高く見えて(中略)下り行かたもいとさがしく遠きに、此辺こそ笹魚多かる地なれば、とらばやとて人々尋ねつつ行く、峠の洞といふ所に至るに、平湯の村のむら長ども御迎に出居て茶など奉る。猶下り行きてもずも川渡るほどに、此川ぞ安房瀧の末なりといふに

もずも川かはのうち橋それならで

先打わたす瀧の上のやま

村長の家にて物まゐりなどして、滝見に物し給はんと谷間の道に分け入る、近づくまゝに落どよむ音さへいと高く、
ななぞち いっひら
七十あまり五尋をひた下りに落来る水の勢、筑紫綿つみかけたらんが如し

鞍嶽とは乗鞍岳のことである。4月とはいえ標高の高い地では若葉も見えず、一行はまだ残る雪を眺めながら歩を進めている。峠の洞までたどり着くと、そこには平湯の村長たちが迎えに出ていた。そこで茶を一服した後、もずも川を渡り、村長の家で食事をしたとある。もずも川は、現在の平湯川になる。地役人の来訪ともなれば、村長は村境まで出向いて厚くもてなすのが役目であった。また、田中大秀の時と同じ様に、役人たちは村長の家に宿泊したことがわかる。そして、宿では湯浴みもせず、早々に滝見に出掛けている。

本書で安房瀧と呼ばれる平湯大滝は、落差の大きい迫力がある滝であり、その水しぶきは絹の真綿の筑紫綿を積みかけたかのようだと表現されている。平湯を訪れる人々が多大な関心を寄せているのがよくわかる。この平湯大滝だが、明治23年(1890)に起きた濃尾大地震によって断崖が崩れ、滝壺は埋没する。このため今よりもあったという落差は変わってしまい、遠く平湯の集落まで響いていたといわれる落水の音は、今は聞こえてこない。しかし当時その音を耳にした旅人は、まずは滝見物をと考えたのだろう。あるいはまた、土地の神への挨拶であったのかもしれない。後にこの滝は、飛騨山脈を日本アルプスとして世界に紹介した、ウォルター・ウエ斯顿が絶賛した飛騨三大名瀑の一つになる。

二つの書には温泉についての詳しい記述は確認できなかったが、富田礼彦の『斐太後風土記』にみることができる。『斐太後風土記⁽¹¹⁾』は、1868年からの7年間に富田礼彦によって書き留められたものを、後の大正5年

(1916)に飛騨叢書として刊行されたものである。富田礼彦は高山県判事であり、国学を田中大秀に学んだ人物である。村の様子と温泉について、順に内容のみよう。

平湯村 縦一町十間、横二十間、高十九石六斗三升二合。山林段別木数不詳。家十四戸。人別七十餘人。

産物 稗三十八石二斗 布十四匹 蕎麦二十三石四斗 山葵七貫目 大豆八斗 小豆一斗 (中略)

此村の辟消し年代は、詳に知らざれども、深山幽谷の村落なれば、他郷他村よりは、遙かに遅れて、最初は、隣村一重ヶ根より分入て、切開きし地ならむ。(中略)

温泉は、平湯村字浴場山 (山名義不詳)

下より湧出る。(中略) 深山中無毛の地なれども、温泉ある故に、いつしか民戸を建並べて、其温泉を田ごとに引分て、稗苗を幾度も植更て、稍秋成を得て年を送ぬ。極寒地故、桑・麻は植ても枯頓て繁茂することあたはず。只菽・小豆・角豆・仙台芋等を畑に作れり。其余は独活・蕨・狗脊薇・蓴・芹等の野疎水菜もて食用とせり。

村の大きさや石高等について詳しく記されている。家は14戸で70人あまりの人が暮らしていたとある。14戸はいずれも浴客の旅館であろう。産物には稗や蕎麦、山葵等の名前がみえる。極寒のため農作に適さない土地だが、温泉を田に引き苗を幾度も植え替える

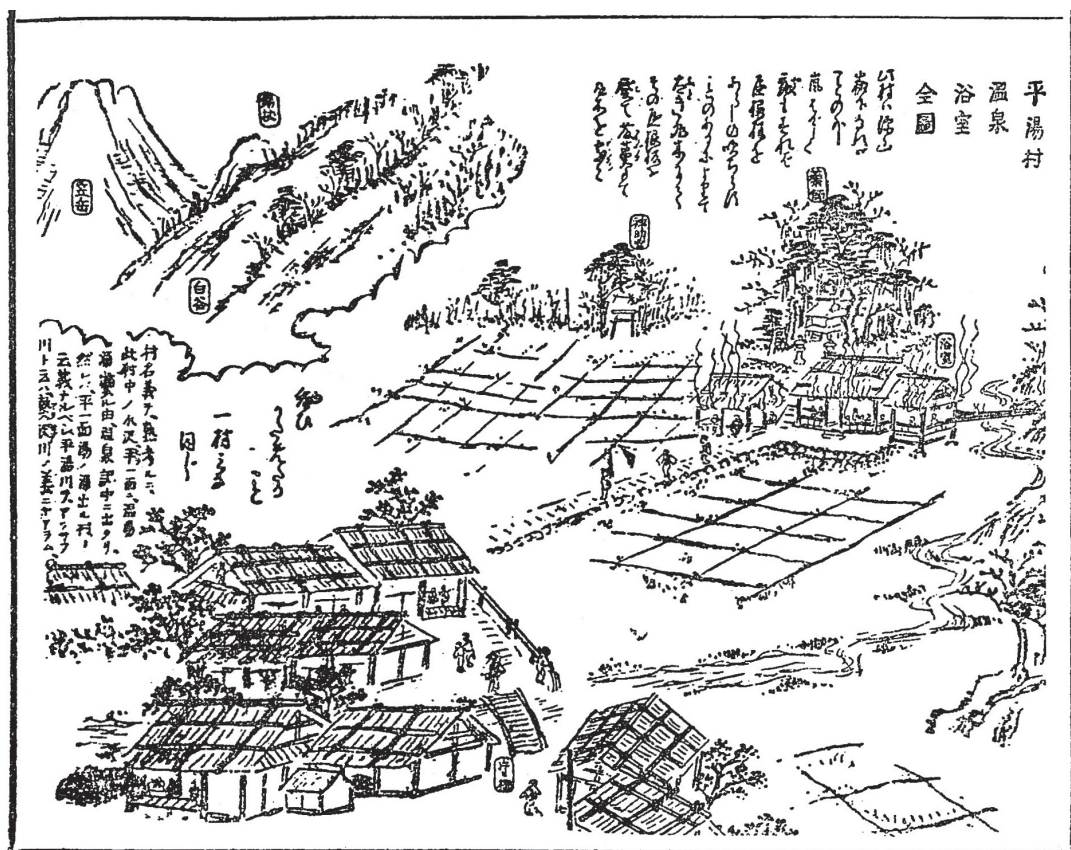


図2. 『斐太後風土記』 卷之十五 吉城郡高原郷平湯村 (国立国会図書館デジタルアーカイブ)

ことで稗を育てている様子がわかる。図2にも、浴室の周囲に田が描かれている。村の開かれた年代は不詳であり、深山幽谷のため隣村から開発されたのだろうとも記されている。温泉については次の通りである⁽¹²⁾。

村より一町ばかり行て、山下より湧出る温泉を樋もて浴室四区の（元来中の二区なりしを、近年左右二区を建添ぬとぞ。）湯斛へ分ち引入て、（清水の樋をも懸たり、熱湯に和て浴ぬ。効能を欲する人は、斛に湯の満たるとき、湯樋を外し、少時待て風にて湯の涼たる時、浴れば効能あり。）其に浴するに温湯甚清潔にて臭気なく、湯斛の底まで透徹て見ゆ。此温泉何病にも功験あり、別て頭痛・疝気・痔疾・腹痛等に奇験有ば、かゝる深山なれども、険嶺を超、危溪を渉て、四時断間なく、殊更春より夏秋は賑しく、高山・古川・船津を初め、國中村々の諸人、群衆する事、諸国の温泉場にことならず。

小謠・浄瑠璃・笛・三弦の音、甚樂しげ也。

浴室は四つに分かれ、そこに一町程離れた泉源から湯を樋で引いていたとある。元々は二区だったのが、建て増しされたようである。熱い湯であるため、清水も引いて温度を調節していた様子がわかる。効能を求める人は、まずに溜まった湯が自然に冷めるのを待って入っていた様子がわかる。湯は透明で、臭気もなかったようだ。何にでも効く万能の湯だったが、特に頭痛・疝気・痔疾・腹痛等に効力を発揮したため、近隣から大勢が険しい道を経てやってきている。殊に夏や秋は賑わい、笛の音や小謠等が聞こえる楽しげな様子が伝わってくる。

明治期以降の文献には、温泉について詳しく記述されるようになる。明治44年に刊行された『飛驒山川⁽¹³⁾』では、吉城郡の鉱泉として次のような温泉が記されている。

蒲田温泉、一重ヶ根温泉、福地温泉の三つは硫黄嶽の麓に、平湯温泉と山伏温泉の二つ

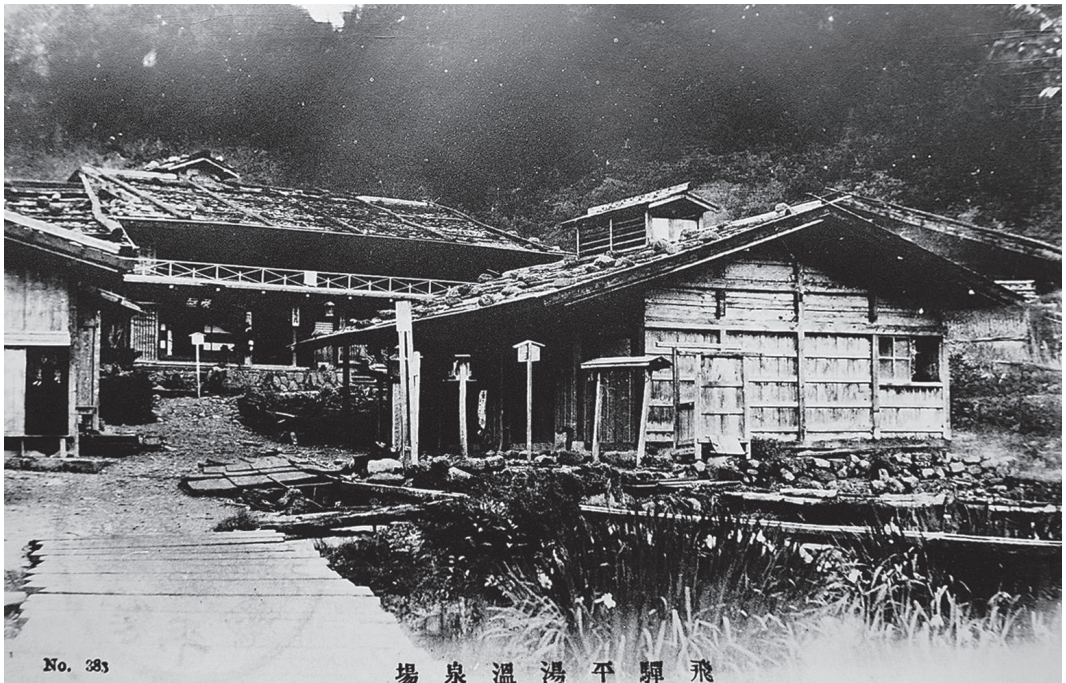


図3. 明治時代の平湯温泉共同浴場（村山昌夫氏蔵）



図4. 大正4、5年頃の平湯温泉全景（村山昌夫氏蔵）

は乗鞍嶽の麓に湧いているとある。平湯温泉と山伏温泉は併記されており、共に炭酸泉で、温度はそれぞれ183度と158度とある。他に下ノ湯と称する一泉があると記されていることから、明治期の平湯には、平湯温泉と山伏温泉、そして下ノ湯の三つの湯が湧いていたのがわかる。同書にはまた、次のような記述もある。引用する。

温泉は三箇所あり一つは〔湯〕と通称するもの浴槽最大なり、二は〔下湯〕と称する浴槽小なり、前者は皮膚病梅毒、後者は腸胃病瘵糧麻質斯等に効あり、三は〔山伏湯〕といふ浴槽なし。

これらを照らし合わせると、前述の「平湯」が浴槽の大きい「湯」に当たり、皮膚病や梅毒に効能があるものになる。「下ノ湯」は浴槽の小さい「下湯」のことであり、腸胃病瘵糧麻質斯等に効く。そして「山伏の湯」は、浴槽のない「山伏湯」と理解できる。山伏の湯

は、山が崩れてしまったために、今は跡形もない。三本の柱で橋を渡していた湯は、石で囲った川のそばにある露天風呂だったといわれている⁽¹⁴⁾。現在は道路下に湧き出している茶色い湯の色が確認されるのみである。

平湯の集落について詳述した箇所もある。次に引く⁽¹⁵⁾。

安房峠の頂上（国境）より降り一里にして〔平湯〕あり、此の地は上宝村の東南端に位する窪地にて四面群巒に囲まれ、地形南北に長く東西に狭く、海拔一、三八七米突、松本より十三里、高山へ八里、船津へ九里、戸数十六旅舎にあらざれば即ち雑貨店なり、田畑には稗、蕎麦、馬鈴薯等を作る（以下略）

平湯にある家は16戸に数を増している。これらの家は、旅舎でなければ雑貨店であると記され、温泉に関わる仕事が専らであったのがわかる。田畑では稗、蕎麦、そして馬鈴

薯が作られ、副業として農業も営まれていた。

平湯には、高山の旦那衆が一ヶ月分ぐらいの米を持ってやってきたと聞いている⁽¹⁶⁾。木賃宿であった時代、またその後も高冷地で米の収穫が難しかったことから、自ら白米を持



図5. 大正時代の村山旅館（村山昌夫氏蔵）

参した方が安く、また好みの米を食すことができたのだろう。

平湯の宿は、昭和40年頃まで14軒でやってきたといわれている。「平湯十四軒」の言葉も存在し、この14軒が長い間平湯で宿を提供してきた家々といえる。三蔵、久蔵、かさや、仁右衛門、おっちゃん、うえ、なかしゃ、源蔵等が、古くから続く屋号であった。この14の数は湯株とも関連しており、それぞれ



図6. 稗田の中の共同浴場（村山昌夫氏蔵）

が共有の湯株を保有することで、宿を営んできたわけである。字名の湯の平にあった地が、昔から湯の出る場所だともいわれている⁽¹⁷⁾。

大正6年の『飛騨国中案内』に記された温

泉をみると、「温泉あり名湯なり（中略）当村の内八町下、谷川の落合、則字〔落合〕と云ふ、此処に温泉三ヶ所あり、一ヶ所は温泉を樋にて取、瀧に致す（以下略）」との記載がある⁽¹⁸⁾。この滝湯の茅葺の建物の手前には、皮膚病の人々が入っていた乞食湯と呼ばれる湯があったと地元では伝えられている⁽¹⁹⁾。皮膚病の人々と同じ湯に入るのを避けるために別に浴槽が設けられ、それを乞食湯と呼んでいたのがわかる。

滝の湯は後に湯上の湯と呼ばれるようになったようである。これは、上方から滝のように流れる湯が共同浴場へと注がれていたためである。薬師堂のすぐ近くに浴場はあり、硫黄を含有する泉質だった。近年では鉄分の多い湯に泉質が変化してきているが、この辺りでは一番古い湯だといわれている。湯は野菜を茹でるのにも使われ、浴場としてだけではなく、人々の生活に密着した存在だったのがわかる。現在の平湯には、平湯の湯と神の湯の他に、三つの足湯が共同浴場として開かれている。

3. 平湯の伝説

(1) 平湯温泉の由来

平湯に伝わっているいくつかの伝説の中で、ここでは主だったものを二つみよう。一つは温泉の由来を説く温泉発見伝説である。平湯で聞き得た話を次に紹介する。

① 平湯温泉の起こり

永禄年間に、武田の軍勢が飛騨高山へ攻め込む途中、安房峠を通る時に焼岳の流煙に吹かれて参っていたところ、安房峠付近で一匹の白猿が平湯温泉を案内して。その頃はもちろんな人家はなかったんですけども。露天風呂といえますか。昔は、私が物心つく頃には、いたるところに自然に温泉が出ていてね。全部そこ鍬で掘って、石で水溜りを作って山菜

とか野菜を茹でて食べ物にしてたってね。自然に湧き出る温泉が方々あって。その頃は寒暖計で計った覚えはないんですけども、手をつけてもつけられんくらい熱くて。菜っ葉類がすぐ茹るぐらいの温泉が方々出てたって。

武田の軍勢は、谷川から水を引いたりなんかして、湯の温度を調整して、それでいわゆるお風呂に浸かって英気を養ったってね。それが平湯温泉の起こりだって。

(78歳男性 筆者聞き書き⁽²⁰⁾)

自然に温泉があちこちに湧出している様子がよくわかる。水溜りにできた天然の露天風呂に猿も入っていたのだろう。その様子を武田の軍勢が目撃したわけである。

地元で語られているこの白猿は、年老いて毛の色が白くなったものだといひ、その猿が怪我をした武田軍を温泉に案内したとも伝えられている⁽²¹⁾。また、武田の軍勢が安房峠を越えてこちら側に降りてきたのは今の神の湯のあるあたりで、焼岳の硫黄の煙に当たって疲弊していたのを助けられたと語る人もいる。峠の付近では、時に亜硫酸ガスの噴出がみられ、今でもこの影響と思われる車の事故が発生しているという⁽²²⁾。もう一つの話を次にみよう。

②平湯温泉

永禄7年、甲斐の武田信玄が、飛騨攻略の際、その武将、山県三郎兵衛昌景が兵を率いて安房峠を越えて平湯へ降って来た時、前方に白い猿の姿を見た。

而もその猿は故ありげに後を振り返り振り返り霧の中へ消えて行った。

兵は不思議に思い、その後をつけて行くと、もうもうたる湯煙の中に温泉が湧き出て、その中に先程の白猿が首だけ出して浸っていた。思わぬ所に温泉の湧き出ているのを見た兵士達は、天の助けとばかり湯に浸り疲れをいやしたという。

(小鷹ふさ『飛騨口碑伝説⁽²³⁾』)

話にある猿だが、近年は猿の出没や被害が多く、近郊には15匹から20匹ぐらいの群れが三つ程存在するようだ。昔は今より猿の群れは少なく、群れから離れた一匹猿のことを「入道猿」と呼んでいた。山の動物が人里に出てくることはなかったものの、安房のような山の中になら、生息していた可能性は十分に考えられる。寛政12年(1800)刊行の『游平湯温泉記』にも、「終夜只鹿猿の聲を聞く」と記されている⁽²⁴⁾。静かな平湯の夜のしじまに、鹿や猿の声ばかりが聞こえてくる様子が窺えよう。山中を彷徨う軍勢と山の獣である猿との偶然の出会いが、温泉の発見に繋がったと本話では語られている。

話に登場する武田の軍勢だが、確かに史実として武田軍の安房峠越えはあったようだ。永禄2年(1559)に武田軍は高原郷の江馬氏を降伏させ、永禄7年(1564)には武田の武将山県三郎兵衛昌景(以下山県三郎昌景)が、江馬氏の降伏を確認した後、三木氏を攻め落としている⁽²⁵⁾。地元でも、信濃から飛騨高原の方へ攻め入るには、当時のルートとして安房峠を越えるのが自然なこととして考えられている。山県三郎昌景は武田二十四将の一人であり、武田軍の中でも重要な家臣の一人であった。

平湯のこの伝説が記録されている最も古い文献は、「平湯記」になる。本巻は「平湯温泉記」とも称され、貞享2(1685)に角田亨庵によって記された温泉記である。角田亨庵は、金森藩の儒医を務めた人物である。しかしながら、当時の原本はない。寛政6年(1794)に起きた村の大火によって、「平湯記」は焼失してしまう。その後、文政9年(1826)に儒学者の赤田臥牛と国学者の田中大秀の二人が、写本を元に「平湯記」を復元させることになる。田中大秀は、前述の通り平湯に縁のある人物であった。題字には、山岡鉄舟の師匠であり

高山の人でもある、岩佐一亭の書が収められている。なお、「平湯記」を所蔵しているのは、先述の小林家である。小林家は、代々右衛門三郎の名を襲名しており、通称は与茂作であった。この名は「平湯は与茂作、今見は右衛門、二頭」と唄にも唄われ、小林与茂作と今見右衛門とが当地方では有力であったの

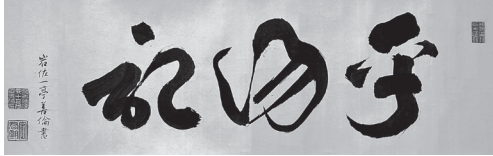


図7. 「平湯記」(小林家蔵)

を物語っている。現当主の武氏の祖父の代からは襲名をやめている。これは、曾祖父の代に鉾山で負債を抱えたことと、何か関係があったようである。それでも、武氏の父の名が與茂蔵よもぞうであったのは、与茂作を想起させるのに十分ではある。当家は平湯村と一重ヶ根村の名主を長きにわたって勤めていた家であり、先祖は足軽だったとも伝えている。武田軍との関わりも示唆されている。

「平湯記」によれば、温泉発見は次のように記されている⁽²⁶⁾。

中古北越

管領甲陽武公龍虎吞怒鵜蚌相窺
之日吾邦東郡多屬管領矣武公輒
使山縣某爲上將侵奪焉上將受鉞
屯于此霜餐露宿備嘗嶮阻毒霧射
人蒸濕侵肌士卒多手足頑痺而不
能荷戈而疾走將士彷徨不知所爲
矣會看一老白猿繫跏而浴軍士皆
怪看焉移時跳梁而去衆知其爲靈
泉而競浴即日精神盎然身體壯健
而能握兵上馬牟自爾以降遐邇相
告都鄙傳呼

武公山県某とは、山県三郎昌景を指してい

るのだろう。彼らが嶮阻すなわち険しい地に行く時に、毒霧によって手足が痺れ、武具を持って走ることもできなくなる。どうしようもなくさまよっていたところ、一匹のよめいて進めない老いた白猿が浴するのに合い、軍士は皆怪しみ見ている。しばらくすると白猿は跳梁して去って行ったので、それが靈泉と知って、軍士が競って浴したところ、元気になって馬にも上れるようになる。それ以降遠近に靈泉は伝えられるようになったと記されている。

先の二つの話では猿が案内するかのような仕事をしたとあったが、ここでは偶然に白猿が沐浴しているのにあったとある。たまたま見かけたのである。案内したというのは、後の時代の脚色と考えられよう。元気になって去って行った白猿の様子から、その湯が靈泉であると知り、兵士達も自ら湯に浸かって効能を体感することになる。白猿と武田軍の兵士達との出会いによって、湯は人々の知るところとなったと伝えられている。

(2) 平湯の薬師如来

「平湯記」に記されている伝説には、もう一つ大切なものがあつた。薬師如来にまつわる伝説である。平湯の薬師如来にまつわる伝説は地元にも伝えられている。まずはこちらからみることにしよう。

① 平湯の金仏様

郡上八幡の殿様が体調を崩し、平湯に療養に来た時にお世話をした名主の娘を気に入って、帰る時に連れて行つた。悲しんだ両親が会いに行つたが会わせてもらえない。

娘は自分の形見として金仏を作らせ、両親が寂しくないように家へやる。金仏を薬師として祀るようになった。

(筆者聞き書き 79歳・78歳男性⁽²⁷⁾)

金仏様というのは、薬師如来像のことである。そして名主とは、先にも出てきた小林家のことである。郡上八幡の殿様が療養のために平湯を訪れ、宿となった小林家の娘を気に入ったと語られている。湯治を終えて帰郷する際、殿様がその娘と一緒に連れて行ったため、娘の両親は悲しむことになる。娘を訪ねても会うことすらできなかったが、両親を案じた娘は金仏を作らせ、自分の代わりにと寄越してくれる。小林家の祖先は湯の近くに祠



図 8. 平湯温泉に伝わる金仏様(薬師如来像)

を建て、その中に薬師如来像を安置したと語られているのがわかる。

平湯に実在する薬師如来像は座像 12センチメートルの大きさで、藤原朝のものとの説もある⁽²⁸⁾。この仏像が収められている漆塗りの厨子の背面には、「奉修後開眼供養 嘉永六年七月吉日」の文字が記されている。嘉永六年は 1853 年に当たる。これにより、薬師如来像の制作年代は少なくとも当年よりは遡るものと理解できる。薬師如来像には光背が付いていた形跡もあり、厨子の内側は黒く見えるが、元は金色だった可能性も指摘されている⁽²⁹⁾。正面からは一見金属製のように見えるため、金仏様と呼ばれたといわれているが、

裏側を見れば木製であることがわかる。あるいはまた、鉾山との関わりによってこのような呼称が付けられたとも考えられる。平湯は鉾山でも栄えた歴史を持っている。

「金仏様」と親しまれてきた薬師如来像は小林家に伝わり、また平湯の人々に大切にされてきたものであった。だが、薬師堂の所属を決めなければならなくなった時に、薬師堂と一緒に薬師如来も禅通寺の傘下に入り、現在に至っている。

薬師如来の伝説をもう一話みる。

②平湯の薬師様

昔から吉城郡神宝村平湯は、万病に効く湯の里として有名であった。

この里に小林右衛門三郎という人あり。この人の娘は稀に見る美人であった。

或時、郡上八幡のお殿様が、家来を連れて湯治においでになり、名主小林右衛門方にお泊りになった。

主は大変喜んで大切に接待をした。

そのうちお殿様は娘を見そめ余の妻にと乞われた。右衛門は只一人の跡取り娘故、たとえお殿様でも、それに身分のちがいもあり、お断りをしたが、お聞き入れがなく、お殿様はお城へ連れてお帰りになった。

一人娘を取られた右衛門は、その後何の便りもない娘に、一目会いたいと思って八幡のお城へ訪ねて行った。

たとえ自分の娘でも城主の奥方故、そうかんたんに会うことは出来ず、城下の宿に泊まって娘に会うことの出来る日を待っていた。

すると奥方が墓参の折にお会いすることが出来て父娘は、つかの間の逢瀬を喜んだが、最初で最後の対面であった。

その時奥方は一体の仏像を父に渡し、これを私の形見にして下さいと涙ながらに城へ帰って行った。

その話を聞いた里人は、薬師如来を祀るた

めの薬師堂を建て、その前に十二神将を祀る前堂も出来、五月八日は薬師如来のお祭である。(小鷹ふさ『飛驒口碑伝説⁽³⁰⁾』)

こちらも、郡上八幡の殿様に見初められた娘が連れて行かれたという内容である。娘が一人娘である点や、尋ねた父が娘に会えた点等の細部に違いはあるが、大筋は前話と同じである。

この郡上八幡の殿様が来村したというのは、史実なのだろうか。前述の通り、本話も「平湯記」に書き留められていた。該当箇所を次に引く⁽³¹⁾。

曩時尾陽

豊旅次村老舎其家一女艶容乃聘
以歸期年之後翁媪相携遠投婿家
高門深宮終日而不得相見嗚咽而
還其女鑄醫王金像遙送父母曰家
山遼夙晨昏無供若欲見我惟像惟
看父母感泣聿營神宇於温泉之傍
安置此像現今尚在焉

尾陽の人とある。尾陽は尾張の別称である。娘の元を両親が訪ねても会えず、むせび泣いていると、娘が鑄造させた医王金像を両親に送ってくれる。そして私に会いたくなったらこの像を自分だと思ってみてという娘の思いに感泣した父母は、温泉の傍に祠を建てて、この像を安置したとある。

「平湯記」にはこのように尾陽の人と記されていた人物だが、他にも「津の郷士⁽³²⁾」と語るものもあり、定かではない。地元の伝承では郡上八幡の殿様とあったが、文献ではいくつかに分かれるようである。しかしながら、有力者が平湯に赴いた時には、名主の小林家に宿を取るのが常であったことを鑑みれば、いずれかの偉人が娘を見初めて連れて帰ったというのは、十分に考えられる話である。そして平湯の薬師如来像は、親子の別離と娘の

親を想う気持ちから授けられたものだと、長く語り伝えられてきたのは紛れもない事実である。

4. 平湯温泉の二つの祭り

平湯には、温泉に関係する祭りが二つある。薬師祭りと湯花祭りである。薬師祭りは毎年5月8日に、湯花祭りは5月15日に行われている。順にみていこう。

(1) 薬師祭り

祭りが行われる5月8日は、薬師如来の御縁日に当たる。薬師祭りは、薬師堂や先に見た薬師如来像の存在から、遅くとも江戸時代には行われていたものと推察される。古い祭



図9. 薬師祭り（薬師堂）5月8日

りである。祭りの詳細を、時系列に沿って次に示す⁽³³⁾。

8日の朝は、10時に各戸から一人ずつ薬師堂前に集まり、堂内外の清掃が行われる。参道には二本の轆も立てられる。通常は閉め切られている薬師堂の全面の戸が開かれ、供え物等の祭りに向けた準備が進められる。

現存する古い薬師堂は、文政9年(1826)に建立されたものである⁽³⁴⁾。昭和49年に村の文化財に指定されるに際して、防火対策のため周囲をコンクリートで覆われることになった。その堂の手前にはまた、大正2年に

建てられた、これよりも大きな薬師堂がある。古い薬師堂に繋がるこちらには、十二神将が安置されている。薬師堂を訪れた円空が奉納した円空仏五体も以前は古い堂内にあったが、県内で円空仏の盗難被害が相次いだことを受けて、円空仏及び薬師如来像は、現在禅通寺に保管されている。円空は二度高原郷にやってきたといわれ、この禅通寺にも滞在している。禅通寺は臨済宗妙心寺派であり、一重ヶ根上垣内にある⁽³⁵⁾。

午後になると、禅通寺住職と町内会長、観光協会会長等8人の役員が、平湯各所の石仏供養に出立する。回るのは五箇所であり、神の湯の不動尊、円空上人の記念碑、平湯峠へ続く山口近くに祀られた石仏九体、平湯大滝麓の不動尊、高山からの街道沿いに置かれていた石仏群になる。これらは皆平湯の集落と他地域との境界に当たる場所にある。この五



図10. 地藏供養 (5月8日)

箇所を順に訪れ、念仏供養を行うのである。円空上人の記念碑には花も手向ける。

15時からは薬師堂での本祭となる。平時は禅通寺で保管されている薬師如来像が新薬師堂に安置され、住職の読経に続いて参加者も指定された経を唱和する。その間、関係者は順にそれぞれ器に収められた鯉とふぐに向かい、榊で清祓の儀を執り行う。また焼香も続けて行う。鯉等の入った器の周囲四方には、山から切ってきた野生の榊が立てられ、しめ

縄も張り巡らされて結界が示されている。香炉は参加者全員に順送りされ、回し焼香がなされる。最後は住職からの法話で締めくくられ、境内では子ども達に菓子撒きが行われる。

本祭が滞りなく終わると、薬師堂の前で住職や役員を中心にした直会が開かれる。お酒や供物の赤飯を共食し、用意されたこも豆腐等の郷土料理を食しながら、堂の補修の段取り等が話し合われる。直会は、本来は神社祭祀の後に行われるものである。鯉供養での榊



図11. 鯉供養 (鯉とふぐ)



図12. 薬師祭り後の直会

の使用や清祓の儀も、かつてあった神仏習合の姿を彷彿とさせるものである。

地元の人達の意識では、薬師祭りの一番の目的は鯉供養であるという。子どもの成長や

温泉についても祈願されるが、最も重要なものは、一年間食に供された鯉の供養だということである。平湯温泉の歴史を辿れば、鯉供養が行われるようになったのは、食事を提供する旅籠になってからのことだと考えられる。

平湯では、これまでは鯉料理がよく出されていたが、近年は飛騨とらふぐを名物にしようとする動きもあって、旅館ではふぐ料理が出されるようになってきている。それでも古くからの客人の中には鯉の洗いを所望する人もあり、その際には鯉料理が提供されている。冷たい水で洗った鯉は身が締まって美味だという。このような変化を背景に、長く行われてきた鯉供養では、ふぐの供養も一緒に執り行われるようになってきている。

(2)湯花祭り

もう一つの湯花祭りは、1980年から行われるようになった新しい祭りである。祭場となる平湯神社は、薬師堂のすぐ近くに鎮座する。元は神明神社としてあった平湯神社だが、明治末期の政策によって村上神社⁽³⁶⁾に合祀されることになり、村の人は長らく遠くまで足を運ぶことを余儀なくされた。戦後にやはり平湯に自分たちの社を持ちたいと考えた人々の働きで、村上神社から平湯の地に再び御神霊を迎え祀ったのである。その後、神社を白弊社に昇格させるために三つの祭りを執り行う必要が生じ、氏子総代らが湯にちなむ祭りが良いと考えて、湯花祭りを始めることになる⁽³⁷⁾。それが1980年10月のことであった。

祭りの開始は、朝8時にバスターミナルで行われる乗鞍スカイラインの開通式になる。当初は上高地への開通式のある4月27日に行われていたが、旅館の繁忙期と重なることもあって、15年前頃から乗鞍への開通式のある5月15日へ移されている。

開通式では平湯神社の神官による安全祈願の神事が執り行われ、獅子舞の奉納が続く。地元で「神官さん」と呼ばれる神主は、袖垣

吉春氏になる⁽³⁸⁾。

バスが無事に出発すると、次は神社での準備が始まる。茅の輪は夏越や師走の大祓の神事であり、茅萱等が使われるのが一般的だが、平湯では湯花祭りに合わせて茅の輪くぐりが行われ、杉葉が用いられている。昼過ぎから夕方にかけては、神社の拝殿で絵馬市が開かれる。色鮮やかな紙絵馬である(図13)。こちらは若連中が主体となっており、高山市の絵馬専門店に依頼した手描きの紙絵馬に、神社印や安全等の文字印を押す。床一面に広げられた絵馬は、馬の表情や毛色、鞍の模様や色付け等一つひとつが異なるものであり、大小、右向き・左向きの各種が揃う。縁起の良い文字も記されている。紙絵馬は玄関に貼られるため、家の入り口の向きによって選ばれる。内の方へ向いた馬が吉とされる。計100枚が用意され、頒布の際には、希望によって



図13. 絵馬市 (平湯神社)



図14. 猿満堂 (平湯神社境内)

購入者の氏名や日付も記される。町内の人や旅行者が訪れては、思い思いに絵馬を選んでいく。

夕方になりあたりが薄暗くなる頃、境内に立てられた千燈に火が灯される。神社拝殿下の、向かって右手に猿満堂が建てられている。その猿満堂を取り巻くように、石段下に設置された神饌とその台、大釜と水器の台の外側に榊が立てられ、御幣としめ縄が張られている。この日は猿満堂の扉が開かれ、中の猿の石像の姿がよくみえる。この猿満堂は、平成13年8月に上室村教育委員会、平湯区長、平湯観光協会、そして主体となった平湯温泉旅館組合が建てたものである。それまでは平湯の伝説にちなんだものがほとんどなかったことから、温泉の発見に関わる猿の石像を祀って、伝説の証にしたという。この猿満堂の幟や飾りは、各旅館にも飾られている。

18時45分には水器に入れられた各泉源の湯が神社に並べられる。平湯にある泉源のおよそ40箇所のうち、30箇所余りの湯が集まっている。泉源名の記された水器だが、1つの水器に2つの湯が入れているものもある。本殿では、神主による拝礼、5人の氏子による雅楽の奉奏が始まる。

19時になる頃、先払いや神主、山県三郎昌景と歩兵からなる武者行列、白猿、奏楽隊や獅子舞い等が、神社を出て町内を練り歩いて行く。行列には、観光客も後になり先になりながら随行する。時には通りに面した宿の窓から、一行を眺める人々の姿もみえる。

神社に戻ると、神主が祝詞を奏上し、観光協会役員、旅館関係者が順に玉串奉奠する。各泉源の湯は煮えたぎる釜へと移され、その湯は東ねた熊笹によって参拝者に振りかけられて、修祓が行われる。湯を受けて、人々は1年間の無病息災を願うのである。修祓の役目は神主の次に白猿も担い、少し大げさな振る舞いによって人々のどよめきが起こり、その中で2回行われる。やがて境内に集まって

いた人々が三三五五去って行くと、一部片付けをしながら、拝殿では祭りの関係者による直会が開かれる。

このような湯花祭りの大まかな形は、20年程前から徐々に整ってきたという。山県三郎昌景と歩兵の武者行列や白猿の登場は当初から続くものであり、平湯温泉の発見伝説にちなんだ祭りであることがよくわかる。近年の外国人旅行者の増加に対して、英語での説明が必要だの声も聞かれる。

平湯らしさを打ち出した新しいこの祭りは、平湯温泉観光協会が主催する、観光客に向けた内容になっている。湯の恵みに感謝を



図15. 湯花祭りに供された泉源の湯



図16. 湯花祭りの白猿と山県三郎昌景

捧げ、また伝説を辿りながら平湯温泉をアピールし、温泉への集客を祈願する祭りである。

おわりに

周囲を乗鞍岳や焼岳等の山々に囲まれた平湯温泉は、蒲田温泉と並んで古くに開かれた浴場であった。その始まりは、山県三郎昌景等の武田家ゆかりの軍勢が、安湯峠越えの最中に焼岳の噴煙に吹かれて難儀している際、白猿の様子を見て湯の効能を知り、その湯で英気を養い回復したことにであると伝えられていた。ここでの白猿というのは老いた猿であり、年をとって毛の色が白くなったものであった。岩手県の鉛温泉で語られている白猿にも共通する、野生の老いた猿である。その猿が湯に浸かり、再び元気になる様子を見た武田の軍勢は、後に自ら体験した湯の効能と共に、そのありかを周辺の人々に知らせたものと理解できる。

武田氏は温泉とゆかりのある武将である。傷ついた兵士を温泉で回復させるよう積極的に試みたことから、山梨県を中心に信玄の隠し湯と呼ばれる温泉がある。平湯温泉もこの武田の軍勢が発見に関わったと語られているが、第一の発見者は白猿であった。猿の行為を通して初めて人々は湯の存在を知ったのである。すなわち、平湯の温泉発見伝説は、動物と武田の軍勢の二つが組み合わさった伝説であり、その背後には平湯の土地の歴史がわずかながら垣間みえる。

平湯では、この温泉発見伝説にちなんだ新しい湯花祭りが行われていた。1980年の平湯神社の昇格を機に作られたこの祭りは、地元の人々によって伝説を温泉地の活性化に生かそうとする試みにもなっていた。神社境内にある猿満堂は、2001年8月に平湯温泉旅館組合が中心となって建てたものであった。伝説にちなんだ事物が平湯にはなかったことから、温泉の発見に関わる猿の石像を祀り、伝説の証にしたいと考えてのことだった。湯

花祭りはこの猿満堂を中心にして行われ、湯の恵みに感謝を捧げ、平湯の発展と子供達の無病息災を祈願する祭りとなっていた。平湯温泉観光協会が主催する、白猿や山県三郎昌景等が登場する趣向の、観光客に向けての祭りでもあった。

この一方で、古くから守られてきた薬師如来の祭りも、同月に行われていた。この薬師祭りは地元の人々の祭りであり、観光客とは関係がない。「平湯の金仏様」の伝説は、江戸時代から平湯の名主を務めてきた小林家にまつわる伝説であり、薬師如来像の来歴を伝えるものであった。その薬師如来像はいつしか平湯の人々に欠かせない存在となって、薬師堂、そして薬師祭りと共に平湯地区の人々をまとめる精神的な拠り所になっているとみることができる。近年では鯉やふぐの供養が祭りの主願と考えられているが、おそらく古くは違った意味合いを持った祭りだったものと考えられる。また、この薬師祭りがあるからこそ、湯花祭りは観光客へと開かれた祭りになったともいえるだろう。

そして平湯の場合、温泉を発見したとされる猿は初めから神格化していたわけではなかった。山の神や山王信仰といった、猿にまつわる信仰との関わりは特に認められない。伝説では、ただ群れから離れた野生の老いた一匹の猿として語られていた。この点を確認した上で改めてみると、初めは一動物として語られていたものが、猿満堂に祀られた後、次第に祭りに組み込まれていく様子が明らかになってくる。おそらくこの変化は、動物が神格化していく過程で各地にみられる動きの一つなのだろう。平湯の場合は、その変化を起こしているのが宗教関係者ではなく、地元の人々の力によるものであった。そして伝説を若い世代へ引き継ぎながら、より良い形へとゆるやかに祭りを変化させている流れが、今の平湯温泉の姿から浮かび上がってくる。

[註]

1. 高木敏雄『日本伝説集』郷土研究社 1913。後に宝文館出版（山田野理夫編 1990）等からも復刻版が刊行されている。同書 182～186 頁。
2. 柳田國男『山島民譚集』甲寅叢書刊行所 1914。後に『柳田國男全集』第二卷（筑摩書房 1997）等に収録。同書 396 頁。
3. 柳田國男『日本伝説名彙』（日本放送協会編・日本放送出版会 1950）253～256 頁。
4. 日本温泉協会編・刊『温泉大鑑』1935。後に解題改訂版の『日本温泉大鑑』（博文館 1941）が出されている。同書 656～681 頁。
5. 山口貞夫「温泉発見の伝説」（『旅と伝説』10-11 1937）13～19 頁。
6. 菱川晶子「温泉発見伝説と動物—長野県上田市鹿教湯伝説の場合」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』第 60 輯 2015）。
7. 菱川晶子「温泉発見伝説と動物—岩手県花巻市鉛温泉と猿—」（愛知大学一般教育研究室『一般教育論集』第 51 号 2016）。
8. 上宝村史刊行委員会編『上宝村史』下巻（上宝村 2005）192～193 頁等。
9. 中田武司編『田中大秀』第 4 卷（勉誠出版 2004）319～320 頁。
10. 「御供の日記」（神岡町史編・刊『神岡町史』史料編・下巻 1975）1283～1284 頁。
11. 富田礼彦『斐太後風土記』住伊書院 1916（蘆田伊人編『斐太後風土記』下巻 大日本地誌大系 雄山閣 1968）85～86 頁。
12. 註 11 の文献、87 頁。
13. 岡村利平編『飛騨山川』住居書店 1911（同書復刻版 大衆書房 1986）430 頁。
14. 2015 年 7 月 23 日現地調査。
15. 註 13 に同じ。
16. 註 14 に同じ。
17. 註 14 に同じ。
18. 上村木曾右衛門満義編『飛騨国中案内』（かすみ文庫 1917）182～183 頁。
19. 註 14 に同じ。
20. 2014 年 4 月 1 日現地調査。
21. 2016 年 5 月 8 日現地調査。
22. 2015 年 7 月 22 日現地調査。
23. 小鷹ふさ『飛騨口碑伝説』（大衆書房 1986）204～205 頁。
24. 神川僧實善『游平湯温泉記』（桐山力所編纂『飛騨叢書第三卷 飛騨遺乗合府』住伊書店 1914）185 頁。
25. 「江馬家後鑑録（全）」（神岡町史編・刊『神岡町史』特集編 1982）443～445 頁。
26. 2014 年 6 月 21 日現地調査。小林家にて「平湯記」を拝見。
27. 2014 年 6 月 20 日現地調査。
28. 『上宝村の文化財』（上宝村教育委員会 2004）13 頁。
29. 2015 年 3 月 3 日現地調査。禪通寺にて薬師如来像を拝観。
30. 註 23 に同じ。205～206 頁。
31. 註 26 に同じ。
32. 土田吉左衛門『飛騨の史話と伝説』（北飛タイムス社 1962）99 頁。
33. 註 21 に同じ。
34. 註 28 に同じ。
35. 法円山禪通寺は、文明 15 年（1484）開山の、本尊を釈迦牟尼仏とする、騎鞍権現を守る山伏の庵が始まりであり、文明 15 年（1483）に越中国国泰寺より久岳祖參禪師を請して中興したとも伝えられている（上宝村史刊行委員会編『上宝村史』下巻 上宝村 2005）。住職の小椋祥久氏は、現 19 世になる。また、『上宝村誌』によれば昭和初期の檀家は一重ヶ根が最も多い 52 戸、次いで平湯の 25 戸と福地の 22 戸になる。他は中尾や神坂、村上にも檀家がみられる（岐阜県吉城郡上宝村著・刊『上宝村誌』1943）。平湯に居を構える場合は禪通寺の檀家となるのが常であったが、近年は必ずしもそうとは限らないようだ。
36. 「明治五年高山県神社明細帳記載神職名」には、吉城郡の中に村上神社とその神職名が確認され、当地域で神職の在中する主要な神社であったことがわかる（熊崎善親『飛騨国中神社編年

史』飛騨郷土学会 1958)。

37. 神社の格式を定めた社格は、戦後の1946年に廃止されたが、岐阜県においては上杉一枝氏の岐阜県神社庁長の代に、金幣社、銀幣社、白幣社、無格社の四格に分類された。平湯神社の扁額は、岐阜県神社庁副庁長上杉千郷氏によって書かれたものである。
38. 2016年5月15日現地調査。初代の神官はこの辺りの神社を仕切っていた沢田直康氏が務めていた。その後2代目は袖垣寅三氏、そして現在の3代目はその子息に当たる。祖父の代から神官を務めるといふ吉春氏は、本職の傍ら、白山神社を中心とした七社余りを管轄している。

(謝辞)

平湯温泉の調査では、中澤勇夫氏、小林武氏、村山昌夫氏、禅通寺の小椋祥久氏をはじめ、多くの方のご協力をいただいた。心より御礼申し上げたい。また、本稿は愛知大学総合郷土研究所研究費による研究成果の一部であり、2016年度日本民俗学会年会で行った発表を元に作成したものである。ここに記して関係各位に謝意を表したい。